

最澄が比叡山を開くはるか以前、聖徳太子（574－622）が比叡山に登り、この地にお堂を建てて、持っていた観音像をお祀りしたのが椿堂のはじまりとされている。伝統に則して593年に摂政に任ぜられた聖徳太子は、熱心な仏教徒でもあった。聖徳太子が杖として持っていた椿の枝をお堂の傍らに挿したところ、やがて芽を出し大きく育ったことから椿堂と呼ばれるようになった。時折、四種三昧のうちの一つ、「常坐三昧」の修行が行われている。